

使われなくなった
のこぎり屋根工場
今後を語る座談会

第十三回

報告書

のこぎり座

座談会内容

『プレオープンズ』

日時、平成二十九年十月二十二日

午後二時～四時

場所、のこぎり二

一宮市竈屋4-11-3

第十三回のご座 『プレオープنز』

日時 平成 29 年 10 月 22 日 14:00 ～ 16:00

場所 のこぎり二

今回は「プレオープنز」の皆さんにお越し頂き、「プレオープنز」とは何者なのか、そして何故のこ座にいるのかを話してもらいました。

彼らを一言で言い表すことは難しいのですが、誤解を恐れず言うのであれば、イベント仕掛け屋グループです。前回ののこ座にご参加いただいた代表の高木さんから、のこぎり屋根工場で何か自分たちにできることはないかと打診があり、後日プレオープنزのメンバーの方ともお会いすることになりました。

プレオープنزはその名の通り、オープンする前の建物に新たな風を通し、本当のオープンをより良い形に持ち上げることを目的として動いているグループです。のこぎり二は既にオープンから二年ほど月日が経っており、ここでプレオープنزがイベントを起こす意味があるのか、初めは疑問に感じていました。それはプレオープنزの皆さんも理解されていて、ここでのイベントはあくまで他の工場のプレオープンイベントのための実績や信頼を得るための準備という意味も込めて行ってみようかということでも話が進みました。そしてまずは「プレオープنز」という議題ののこ座を開いて一宮の皆さんの意見や反応を見てみようということになりました。





プレオープンの代表的な実績は名古屋黄金エリアにあるビルで行われたイベント「一夜限りの黄金商店街と月灯りの移動劇場」が挙げられます。食堂、古着、本などが並び、インスタレーションの他、ライブやダンスパフォーマンスが行われました。このイベントは多くの若者を集めただけでなく、近隣住民にも関心を与え、このビルの認識に変化を与えました。近隣の駐車場を借りる為にあちこち回られた挙げ句、全て断られたそうです。しかしイベント当日はその断った人が興味本位でビルを訪れてくれたそうです。断られても何でも一度挨拶に行く。それが次につながる第一歩です。「プレオープン」という名前には「今まで光が当たらなかった場所や、これからスタートしていく場所にスポットを当て、その存在を知って頂く」という意味が込められているそうです。

僕は今回のこの座で、彼らを受け入れる人と受け入れない人が両方出てくるだろうと思っていました。しかし否定的だったのは僕だけで、他の参加者の方は前向きな意見ばかりでした。もちろん今回のこの座に参加する人はイベント肯定派の人が多いいというのは予想できますが、もう少しマイナス面の意見が出てもおかしくないだろうと思っていました。それだけ皆さん新しい風を待ちわびているのでしょうか。

リテイルやせんい団地、のこぎり二でもイベントを企画された森さんは、僕に高木さんを紹介してくれた方で、もちろんイベントには賛成でした。彼女は自身でいくつかのイベントを企てているので、イベントの意味や成果、苦勞を身を以て感じているはずです。彼女がプレオープンズに期待、信頼していることは、話題性、集客力、そしてなりよりイベントの質の向上への情熱だそうです。彼らは営利目的の集団ではなく、お金がかかっても良いものをつくるという意識が根底にあるようです。

工場オーナーの野田さんは現在自身の工場のオープンに向けて種々のイベントや会を開いていらっしゃいます。近所の方が気軽に立ち寄れる場所及びイベント。大勢の人が来ても困ってしまうので規模は小さくても人の入れ替わりがあり、いつも新鮮な空気がそこにあるもの。地域規模でのプライベートと公が混在するような場所を求めているようです。プレオープンの黄金エリアでのイベントは500名を超える人が訪れたそうですが、規模や形態を変化させることは可能です。

プレオープンの西尾さんは、のこぎり屋根を訪れる人に対してはもちろんです、オーナーに対して特別なイベントをするべきではないかとおっしゃっていました。例えばオーナー限定のイベントであったり。その場合、イベントに興味のあるオーナーを見つけなければなりません。イベントを実行するにしてもそれを許可してくれるオーナーは数少ないでしょう。そこを探し出すことが第一の課題かもしれません。

長年のこぎり屋根工場を撮影し「ノコギリノコドウ」という写真展を一宮で開催された林さんは、イベントをやることで若い人が訪れてくれる、そうゆう裾野が広がればのこぎり屋根の認知が広がり、この土地を支えてきたものが知らないうちに無くなっていくことを避けられるのではないかと、イベントを行うことの意味を明快に答えてくれました。林さんは先月名古屋でものこぎり屋根工場の写真を展示されました。名古屋では一宮ののこぎり屋根工場の認知度は低く、特に若い人からの関心は少なかったようです。そういった実体験を踏まえ、人に認知させるということと同時に、認知されていないという「可能性」をこれからの活動に活かしていくという意気込みを感じました。





各務原市からいらした家具作家の小林さんは以前からプレオープنزとの交流がある方で、今回初めてのこ座にお越し頂きました。各務原市では空き家対策が進んでおり、市が空き家の状況を取りまとめ、新たなユーザーとの橋渡しを行っているそうです。市が行っていることなので市民は安心して空き家を提供したり、使用することができます。一宮市の工場ではこのような市の動きはないと思います。西尾さんから「工場を貸したいオーナーや借りたい人は実際に存在するのか」と問われました。僕が知る限り工場を貸してもいいとおっしゃっているオーナーさんは一人しかいません。しかもそれは「昔から知っている平松さんの頼みだから」という条件付きであるかもしれません。他にいくつかの工場に貸して下さいと頼みにいったこともありますが、どこもすぐに断られました。それはオーナーさんが現在利用しているか否かは関係ないと感じました。とにかく貸すつもりはない。もし頼みにいくのが僕ではなく市だったら、オーナーの反応は変わるのでしょうか。少なくとも話を聞く耳をもってくれるかもしれません。各務原市は人事の起用が優れているのか、少し責任の伴う仕事でも若い人や新しい発想の持ち主を起用し、その人が運んでくる新たなハブニングを上手に受け入れて進んでいるなど感じました。

のこぎり二で行っている機織り教室「尾州織姫」にも参加頂いてる松原さんは、イベントを行う意義について「私たちの世代は現役の工場が周囲にたくさんあり、織物業とは近い関係にあり、自分たちの生活の基盤を感じることができた。今の若い世代の人達にとってはそれがとても遠い存在になってしまっている。自分たちの地域がどんな歴史を辿って今日まできたのか、なにで支えられているのか、それを知ることは自分の足下をしっかりとしたものにすると同時に、この地で暮らしていこうという気持ちを生むことにも繋がる。」明確な意識をもってイベントを行えば、それはきっと伝わるなど感じました。

他にもプレオープンズが何かやるということではいらっしゃる方が3名程。食に興味をお持ちの方は、マルシェなどのイベントは今まで知らなかった食に出会うチャンスということでよく訪れるそうです。スーパーで買う安い食べ物ではなく、作り手が見える安心で質の高いものを求めています。そういう観点からみてもイベントの意味はあります。

藤森さんは実際に「一夜限りの黄金商店街と月灯りの移動劇場」に訪れたそうです。そこでプレオープンズのセンスと実力とネットワークを実感し、彼らが行おうとしている動きに対しては期待が大きいそうです。藤森さん自身ものこぎり屋根に対してアクションを起こしており、そこでもネットワークが生まれることを期待しています。

のこぎり二に住まう青木さんからはこんな意見がでました。「プレオープンズさんは七人の侍のよう。野武士に攻められている農村を救う為に立ち上がった侍。でも大切なのは村を去るときに侍が言った言葉『本当に勝ったのは農民だ』。プレオープンズのイベントによってその日の収益が上がった周囲の商店はすでに気がついていないはず。そして次は自分たちで立ち上がって前進しなければならない。もしプレオープンズがイベントをするのであれば、一宮市ののこぎり屋根の特徴である『数の多さ』に着目し、それを活かす為の工場をつなぐネットワークをつくるのが重要。」

起や玉ノ井の地域は少し歩けばあちこちにのこぎり屋根工場が見えます。オープンスペースとなったそれらの工場を巡るようなイベントが企画できたらとても面白いことになると思います。



起に洋館や蔵を含む大きなお屋敷をお持ちの田内さんご夫妻も今回のこの座にご参加いただきました。今は使い道がなくなってしまったお屋敷を解体せずになんとか維持する為に、これからそこを色々な人に利用してほしいと考えていらっしゃいます。良い機会でしたので、この座終了後プレオープンの皆さんと田内さんのお宅にお邪魔しました。大掃除や内部の一部解体、そしてご主人の毎日の努力によってどんどん綺麗になっているお宅を見て、皆さん興奮が抑えられないといった感じでした。田内さんのお宅は工場と違って、今すぐにでもイベントができそうな場所です。この地域の毛織産業、歴史や文化の基点である「起」でイベントを行うことは、今後の動きに大きな影響を与えるかもしれません。

また、奥町にある野田ビス工場も訪れました。オーナーさんは相変わらずフラットな方で、僕らの見学を何の抵抗もなく受け入れてくれました。内部はいつ見ても圧巻です。長く続いた雨によって基壇に水が溜まり、遺跡のようでした。プレオープンズさんたちがこの場所に何を感じ、どんな可能性を見たのか、またの機会に伺いたいと思います。

次回この座は「ノコギリヤネ・ウツホモノガタリ」
都市計画・まちづくり専門家の今枝忠彦さんのお話を伺います。今枝さんと僕の30年という年齢の違い、世代の相違を意識しながら「対話」したいと思います。よろしくお願いします。

平松毛織株式会社
平松久典

